令和４年１月21日

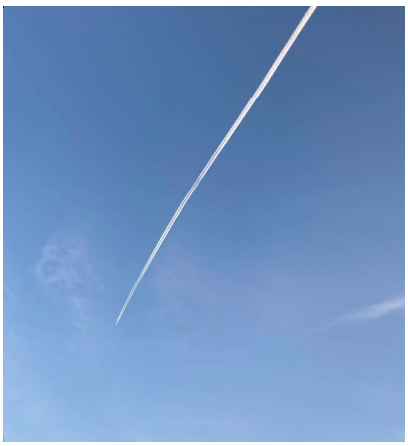
◆　シャガールの「青」　◆

昨年のNHK大河ドラマ『青天を衝け』のオープニング。そのエンディングの場面で、主人公、渋沢栄一とおぼしき人物が、彼の周りを囲む人々の中心で拳を衝き上げるシーンがある。衝き上げたられた拳の先、最初は淡い桃色を背景に桜吹雪のようなものが舞い落ちる情景が、次第に青色へと移り変わっていく…。まさに「青天」を衝く印象的なシーン。この時脳裏に浮かんだのは、シャガールの手になる、ドイツ・聖シュテファン教会の青のステンドグラスであった。

20世紀を代表しフランスで活躍した画家マルク・シャガール。彼の使う「青」は独特で、よく「シャガール・ブルー」と表現される。

「（前略）シャガール・ブルーは人生の悲しみ、苦しみ、喜び…全てを優しく包み込んでくれる深い慈愛を感じることができます。（後略）」（「道の駅　南魚沼」HP　お知らせ「シャガールだけの青「シャガール・ブルー」の世界」　http://www. michinoeki-minamiuonuma. jp/2017/06/25/）とあるように、その独特なタッチは、複層的なおかつ繊細な表現で我々を魅了し続ける。このHPの説明にもあるように、「社会的混乱や時代背景が彼の制作に大きく影響したことは確か」とのことで、彼の生い立ちやその後の生き方が、こういった表現への萌芽となっているようだ。

２回目となる「大学入学共通テスト」が終了した。ある教科では、その分量の多さに戸惑ったこともあったかと思う。思うような結果となった皆さん、そうではなかった皆さん。昨年も書いたけれど、自己採点の結果は、全ての結果ではない。これが決定的なものではないことをもう一度確認し、戦略を立て直そう。



そして、これから実施される個別大学試験への準備の合間に、例えば「人生の悲しみ、苦しみ、喜び…全てを優しく包み込んでくれる深い慈愛を感じることができ」る、シャガールの「青」に触れてみよう。何ともいえない清々しさのようなものを感じ取ることができるのでは…。

いったんリセットし、再スタートを切ろう。

まだ序盤戦。受験は、始まったばかりだ。